

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

大正十五年六月一日印刷
大正十五年六月十日發行
香車社第一輯

1926

香車詩社

第6期

藤 三 首

藤の花うすわらさきに咲き初めてその蔭に見る
夏の色映

水たに映みて上る老藤は我がふるさとの
こよなきながめ

故郷の静りにせんと藤くわひ人さしたる姿
病人のごと

—— 高橋 水 聲 ——

藤の花うすわらさきに咲き初めてその蔭に見る
夏の色映
水たに映みて上る老藤は我がふるさとの
こよなきながめ
故郷の静りにせんと藤くわひ人さしたる姿
病人のごと

高橋水聲

香 鹿一第

次 目

28. 27 26 25 23 17. 16. 15. 14 12 11 10 8 7 6 5 4 2

詩

二篇

高橋水聲

蛙はかなじい

蛙は

なまたいです

あんなまり

夜が

よいちやあひ

どこかで

もう一匹の蛙も

ないてませう

残されたのは蚊だ

いくらなかうと

たかが蚊ぢやないか

晩まで空と

にりめつこしろ

泥田の蛙が

雨を呼んでゐる

春・春
夢のやうに

小林直人

閑寂な支那風の郊外は
春の風船
うつらうつらとこんな午後
夢のやうな岬の燈台が
儼然さうに野原を散策してゐるのです

私の耳は
ここちで練り上げたまがいお菓子
そして
女の顔は社に包まわつてゐる
たんぽぽが
ぽつんと上へ調て笑つたりです

畑三譜

松本純一

ボックラ極られた土
土は黄昏に挨拶し
葉床の根を後す鬼

泥鞋がヒトリで畦に坐り
カラカラと鳴る草を喰べてみた
隣り青い空が
農婦の腰をまんまろく覗いた

白い田に
鰻と戯る子供は裸か
夢の龍があつたら
オモケヤにするのだが

かへろぞへ

石橋叩渡

兄さ 歸ろをへ
俺 先き 歸ろを

家は遠いをへ
日のある中に

兄さ まだかい
俺 先き 歸るぞ

父は 待つてろを
豈 なく

書 窓 描 寫

ひ さ と し

花婿か

花嫁を連れて

通に來やがった

ナエツ!

とつ 攫まいてやらうか

こんなところ

花なんが

ちやしないを

春

——短詩五篇——

中野 勇 雄

泣き明かした芽の緑色がスチロキに映って
朝を展けてゆく

みんなは

どつと

躍々り浮氣をはやし立てた
その光り

◆

帽子にタンホが生えてあり少な
顔がきらきら光ってある

◆

水車に

蹄音をしかけてあり

雲

◆

緑色り市街が揺れ
窓を見失った蝶々

五月よ

石橋叩渡

何処までも
何処までも
空は広いよ
暗れてるよ
何処までも
何処までも
バラックは続くよ
屋根は光るよ
青い葉っぱは
青い葉っぱは
恒張に伸びるよ
すくすく伸びるよ

飛行機が
飛行機が
高く高くよ
五月の空よ

すばらしい朝

五十嵐 節郎

すばらしい朝だ
向日葵が大きく揺れる
太陽が輝いてゐる

たったそれだけの
すばらしい朝だ
そのまゝの生長だ
生命のみちを跳躍だ

哀唱思篇

高橋久餘子

1. 面影は寂し

久しくまゝ元ぬ
君のおもかげ

そは日記をかいた
その日のゆけは

いま日記をかいた
そのなかに校める寫真
いつまでもいつまでも
みつめけり

されど面かげは寂し
冷たき頬と影なれば

2. 君は嫁く

乙女の人へ
さやうなら！
永久に、永久に
さやうなら！

夢よ、夢へも
さやうなら！
みんな、みんなへ
さやうなら！

いかなるかたか胸のうち
君は嫁く、君は嫁く。

五月は

土崎郁子

さきりが
日輪を
ぼつかり
抱く

林が
音で
しつとり
淫る

つほめが

窓から
ぼつさり
はいる

柳が
小川に

ふつくり
浮ぶ

私が
葉ざくりに
こつたり
口づける

そして
瀧で泣いてみる

その聲が
すつかり
なつかしい

五月ふの

石橋叩渡
！夕顔と糸瓜

郊外に
三ヶ月

私にはまだ
お友だちは
ありません

呼びかけるまうも
呼びかけられるまうも
ありません

かたくなな
いこちな私は
お隣りの方に
挨拶をすることも
出来ないのです

いつもどこへ行って
ひとりぼつちです

それでいいのだと
毎日の暮る部屋に

ぼつねんとしてゐますが
矢張り寂しくてありません

時々街へ出ますが
却つて寂しくなつて
かへります

此の間街から帰りに
ふし鬼を出して
夕顔と糸瓜の種を

買ってきました

そして橋下と

垣根の下に

蒔きました

それから毎朝

蒔きの中に

ボンブの音を気にしながら

ソツと水を汲んで

やっておます

まだ蒔いて四日ですかり

芽は出ません

水をやる度

たんねんにしるべすすが

いつもおつかりします

けれど楽しみで丁

あの葉の下の片の株が

夕顔の種子から

産んだ種子のやうな

糸瓜の種子から

可愛らしい芽が

出るのかと思ふと

人の居る井戸からでも

水を汲んできて

やりたくなります

湯が熱くておろと

若しや乾きほしまいかと

出てみたり

本を讀んでゐても

考へてゐても

思ひ出しては

のぞいて見るのが

一日中何遍だか

知れません

或る日の日記

八月十日

朝起きた

飯を食

食

八月十一日

午前七時起床

今日も金にやる

仕事はなにかと

あつた

毎日も暇だから

よく考へないことに

気がする

在りて

せつかちで無性で

植物や草花などに

ついと手を触れたことのない私も

此の頃は夕顔と糸瓜で

種々人間になつた種を

気がします

そして寂しくなると

今にどつちも芽を出して

青味のない破けた垣根と

カイテンのない窓辺と

白と黄と花までうけて

にぎはしてくれらるう

なにと考へながら

楽しみにしてゐます

(まはり)

大正十一年

い
つ
と
と
い

疾

心
方
人
子

×月×日
何だか腹工金が
少し變だ

夜をちからにまた来りい
今日も生きてゐるなと
日記に認印を
捺して寝る

×日×日

愈々散文。効が
あるはれた
十内来た
夜達万ざい
奮然してバツト
玉倒るふ
そして
二重の部屋を
向め切つて
焼けざまに
すばすば吸ふ

鏡を見ながら
口を歪めたり
伸べたり
色々にして煙を吐く
どんだん眠ふ
部屋中
蒙々と煙がこもる
煙が何だか
煙にならやうだ
頭がふらつく
豆腐屋の
音が下には
聞こえる
奴、なんて今日日
光氣がなさんだ
しつかりかいてくれ

(へとはり)

短歌

短歌

春の海

松村 清

豊浪の澳舟うつ音は細みつつだぶりだぶりと
まぶた重たき

小漁師の赤ぶんどしのぬれ色や舟こぐ術の
まさくたしめさ

ひる浪にゆつたりゆれてゐる澳舟のいかりまく音
はじめてきこゆ

むくおくとひいで、仰向くひまながさ　さまたげ
あらぬ心寂しむ

ひる波のうねり重たき海原　胸重み見る
ひさしきにありて

千なぐさに泡沫たつ音のさへる寂し今度の波は
とどかざりけり

雨照りうもつうき空にうなりあぐる大アンテナを
真下にし見つ

—— 水産試験場 ——

雑歌

柿沼一好

寝たうはぬ心けうとく外に來ればあかつき
海の潮ざいの音

生ありて過せば日々の悔ありよしなきことも
妻に言へたり

たつまれて他人の衣縫ふ幼な妻　いそいそとして
針を運ぶに

得る金はともしけれども身になれて日々の生活の
苦しきはあらず

日暮漫歩

石橋叩渡

この日頃 日暮らしなればそぞろ歩く
裏の煙の肥の香懐かし

黒々と打ち返されし寒煙の
水さき土くねえと淀り見ぬ

しづみれるこゝ寒煙の夕闇に
そとふれてぬねをらすめの花

行き過ぎし人けろほろと小さくなり
見えざるまで見送り居たり

そらそめの花うつ紫に咲きて居り
こゝ裏地の夕暮れしづかに

君に贈る

土崎郁子

離さざりき 汝が歌書^{うたがき}の置土産
文窓見ればソトありにけり

桃色の文あはれにも懐かしき
かほをきべしのあとをたどれば

五月雨の夜こそ思ひ出悲しきに
訪れる人としてもなし君の逝きては

蛾は蛾だ

高橋水聲

誰れやと思つたら
なつた 莫迦くせん
また 泣きか 蛾かやめか

しかし
おかしな
色 狂じみ 蛾には
どん 狂じみ 蛾には
この 蛾には 逆づけ せねえや

うす 氣味 うれい わらひを
投げて 歸さやがる。

